

「神の国の宣教」

2015年05月18日

ルカによる福音書 4章38節～44節。 イエスは会堂を立ち去り、シモンの家にお入りになった。シモンのしゅうとめが高い熱に苦しんでいたのので、人々は彼女のことをイエスに頼んだ。イエスが枕もとに立って熱を叱りつけられると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。日が暮れると、いろいろな病気で苦しむ者を抱えている人が皆、病人たちをイエスのもとに連れて来た。イエスはその一人一人に手を置いていやされた。悪霊もわめき立て、「お前は神の子だ」と言いながら、多くの人々から出て行った。イエスは悪霊を戒めて、ものを言うことをお許しにならなかった。悪霊は、イエスをメシアだと知っていたからである。朝になると、イエスは人里離れた所へ出て行かれた。群衆はイエスを捜し回ってそのそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた。しかし、イエスは言われた。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならぬ。わたしはそのために遣わされたのだ。」そして、ユダヤの諸会堂に行き行って宣教された。

主イエスは会堂を立ち去り、シモンの家に入られた。シモンは後に、主イエスからペトロ（岩）とあだ名を付けられ、第一の弟子になった人である。ペトロは妻の母・しゅうとめと同居していた。そのしゅうとめが熱を出し、苦しんでいた。いやしを求められた主イエスは枕もとに立ち、熱を叱ると熱は去り、しゅうとめは起き上がってもてなした。熱病も悪霊に取りつかれたと理解されていた。その悪霊を追い出し、いやされたと伝えている。いやす力をもっていることを知った人々は苦しむ病人たちを連れて来た。主イエスは、病人の一人ひとりに手を置いていやされた。また、病人に取りついていた悪霊は「お前は神の子だ」とわめいて、出ていった。悪霊はイエスをメシア（キリスト）であると知って、恐れたからである。主イエスが洗礼を受けた時、天から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が聞こえたが、悪霊も同じ認識をしたという。神と対極にある悪霊がイエスの正体を見抜いていたことは興味深い。主イエスは悪魔にイエスがメシアであると公言することをお許しにならなかった。主イエスを理解できない人々の間で、その働きが誤解されることを避けるためであったのであろう。

翌朝、主イエスが出て行かれると、民衆は探し回り、自分たちから離れないように懇願した。医者として留まってもらいたいためである。しかし、主イエスは「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならぬ。わたしはそのために遣わされたのだ」と言って、諸会堂を巡り、神の国の宣教をされた。

主イエスの宣教は ① 病気のいやし、② 悪霊の追放、③ 言葉による教えの三本柱であった。病気、悪霊につかれることは罪の裁きであると理解され、彼らはユダヤ人の共同体から、汚れた者、罪人として排除された。好んで病気になる者はいない。貧しく、不衛生な生活で病気になるのだ。彼らは肉体的、経済的、社会的にとどまらず、宗教的にも苦しめられた。彼らのいやしは、人間回復、共同体への復帰を意味した。また言葉によって、神はあなた方を愛し、祝福していると深い慰めと励ましをもって語られた。主イエスが示した神の国は、捨て置かれた彼らには、まさに福音であった。苦しむ民衆が主イエスに群がったことは容易に想像できる。主イエスは「枕する所もない」ほどの多忙を極め、神の国の宣教は時代を揺り動かした。